2024 年度「大学入門ゼミ」実施報告書（教育学部）

（1）実施の概要

令和6年度の大学入門ゼミは、昨年度同様6クラス編成（1クラスあたり学生数：28名×5クラス＋29名×1クラス）で実施した。教育学部学校教育教員養成課程においては、1～6組の授業教室が前期「大学入門ゼミ」のみならず、後期実施の「教職概論」(学部実地教育科目)までを通して“ホームルーム教室”となるよう、講義室調整を行った。併せて、担任教員の学生指導のクラス間連携を図るとともに、学生にも初年次教育の一体感・一貫性を感じさせるため、ホームルーム教室となる講義室を、中庭を取り囲む4・5号館2階に、クラス番号順に並ぶよう集中配置して実施している（1組421→2組422→3組423→4組526→5組525→6組523）。また6クラスの偶数編成とすることで、1・2組、3・4組、5・6組の2クラスを「ペア学級」とし、弾力的な学習活動と学生指導ができるよう工夫した。（なお、指導体制としては、各クラス1名の主担任が主に学生指導を行い、2クラスに1名の副担任が2クラスの指導サポートを行う体制とし、教育学部1年次生全体を9名（＋全体コーディネート1名）の教員が指導を担当することとしている。

本学部学校教育教員養成課程における令和6年度前期「大学入門ゼミ」の授業計画については、4月15日実施の初回授業において、オリエンテーションとして学生に周知を行うこととした。しかしながら、初回授業の実施に関して、大きなトラブルが発生した（→詳細は 項目(3)に記載）。

第1回授業において、事前にmoodle「大学入門ゼミ」コースページに授業計画のpdfファイルを掲載しておき、moodle へのアクセス方法を周知し、学生一人ひとりがアクセスすることによって、1年次学生全員の moodle 閲覧スキルを確認した。

全学共通コンテンツについては、共通コンテンツに関連するミニ演習を円滑に実施・指導できるよう、昨年度より実施体制に工夫を加え、415講義室で一斉授業を行い、2名教員がティーム・ティーチングで指導にあたることとしていた（実際には621 講義室に変更し実施せざるを得なかった→(3)参照）。1つの共通コンテンツを担当する2名の教員のうち、1名は前年度担当した教員が2年目担当を行い、残る1名は、本年度新たに「大学入門ゼミ」を担当する教員が担当指導を行う体制をとっている。これにより、2年目担当教員が初めて担当する教員に、共通コンテンツの内容や指導方法を伝達・共有（＝伝承）することができる。すなわち、2年目の教員が主担当として全体指導にあたり、本年度初めて「大学入門ゼミ」を担当する教員が副担当として、学生の個別指導などにあたる方法である。令和2年度までは2名の教員が2つの別々の集団を指導する方法で実施していたが、このようなティーム・ティーチングで指導にあたることにより、2名の教員が別々に授業を実施する方法に比べ、1人ひとりの学生へのより細やかな対応・指導が可能となった。併せて、令和4年度以降、当該年度に初めて「大学入門ゼミ」を担当する教員が、共通コンテンツの副担当として授業に関わることによって、「授業に参与しながら、共通コンテンツの内容・指導方法を理解する」徒弟的な伝達・共有（＝伝承）が可能になることを期待し実施している。

教育学部「大学入門ゼミ」における全学共通コンテンツについては、附属学校園訪問の日程調整との兼ね合いから、附属学校園訪問を挟むように表1の日程で実施した。特に「レポートの書き方」については、他科目授業、特に第1クォーター開講科目などにおいてレポート課題が多く出されることが想定される連休前に実施することとしている。

表1　教育学部学校教育教員養成課程「大学入門ゼミ」 授業計画（実施分）

回	月・日（曜日）	授業内容の概要
1	4月15日（月）	**オリエンテーション**（授業説明・moodle 設定と活用説明）　415→(変更)811・821 領域振り分け当初希望調査・進路志望当初調査・附属学校園訪問希望調査など 入学後約1週間の大学生活について
2	4月22日（月）	[共通コンテンツ①] **レポートの書き方**　415→(変更)621
	4月24日（水）3限	教育学部1年次生「基盤カテスト」（13:00～／621講義室）
3	5月01日（水）	[共通コンテンツ②] **日本語技法**（+DRI①）　415→(変更)621
4	5月09日（木）	**小豆島一日研修　事前指導**　415→(変更)621
5・6 ・7	5月11日（土） 5月12日（日）	**小豆島一日研修（日帰り）** 5/11(土) 1組・2組・6組　5/12(日) 3組・4組・5組
休講	5月13日（月）	
8	5月20日（月）	[共通コンテンツ③] **情報整理の方法**（+DRI②）　415→(変更)621
9	5月27日（月）	（全体）**学校園訪問　事前指導**　415→(変更)621 （最終課題事前周知）**「学校園を探究しよう」全体説明**+ロイロノートの使い方 （組別）**探究課題を設定しよう**　～学校園訪問の注目点も含めて考えよう～
10	6月03日（月）	**（全員）附属小学校　訪問**（1・2組：附坂小／3～6組：附高小）
11	6月10日（月）	**附属小訪問成果交流＋次回訪問に向けた観点整理**　HR 講義室
12a	6月17日（月）	**（選択）附属坂出中学校　訪問**　※附幼・附高中を訪問する受講生bは休講。
13	6月24日（月）	[共通コンテンツ④] **プレゼンテーションの方法**　415
12b	7月01日（月）	**（選択）附属幼・附属高松中　訪問**　※附坂中を訪問する受講生aは休講。
14	7月08日（月）	**「学校園を探究しよう」中間報告会・発表練習**　HR 講義室
休講	7月15日（月祝）	（授業時間外学習活動　集中取組日）「学校園探究」各自プレゼン作成・発表練習
15	7月22日（月）	**「学校園を探究しよう」組交流・発表会**　授業評価他　HR 講義室

また、第９回（５/２７）以降、前期後半の授業においては、「学校園を『探究』しよう」と銘打ち、受講生一人ひとりが、幼稚園・小学校・中学校に関する探究課題を設定し、文献調査・インターネット上の情報リサーチなどをふまえ、報告書にまとめ、プレゼン発表を行うという一連の学習活動を行った。この探究活動は、既習の共通コンテンツ①～④で得た知識・スキルを活用して取り組む学修機会として位置づけ、共通コンテンツを通して得た知識・スキルを「自分のものとして使える知識・スキル」に高めることを目指して実施した。（これらの探究活動については、２０２０年度、大学入門ゼミ FD としてオンライン授業公開を行った授業をベースに、さらに改善を重ね実施している。）

教育学部においては、moodle・zoom 等とは異なる「授業支援システム」を、学生が授業において活用しながら受講することができるよう、昨年度より整備をすすめている。これは、GIGA スクール構想により全国の国立・公立・私立の小・中・高等学校に整備されているタブレット端末とともに、授業において活用するために整備されている「授業支援シス

テム」と同様の環境である。教師を目指す上で、現在全国の学校に整備されている授業支援システムを１・２年次のうちに「自らが活用して学ぶ」経験を通して、３・４年次で「授業で活用して指導することができる教員」としてのスキルを高めることを、教員養成における指導に位置付けることが重要だと考える。本年度も継続して、この授業支援システムを、共通コンテンツ①～④で得た知識・スキルを活用して取り組む学習活動「学校園を『探究』しよう」において活用することとした。

（２）学生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見・今後の課題

平成２６年度の学生アンケートに、レポートの書き方をもっと早く実施してもらいたいとの希望が多かったことから、平成２７年度以降１か月ほど前倒しし、大学入門ゼミ前半において授業を実施している（特にクォーター制の導入もふまえ、連休前に取り扱うこととしている)。共通コンテンツ「レポートの書き方」に関して、学生アンケートには「感想とは違い、今後自分がどのようにしたいかを書けば良いと言うことを参考にして、各教科の最終課題レポートを書くことができた」「大学に入ってからレポートを書く授業の量が明らかに多くなり、書き方がイマイチ分かっていなくて困っていたので、正しい書き方やポイントをしっかりと押さえることが出来てとても良かった」「ゼロからスタートの状態だったので基本の基本から細かく教えていただけて良かった」「高校ではレポートの書き方についてあまり詳しく説明された覚えがないので、正しい書き方を一から学べたことが良かった」「引用のしかたや Word の機能について細かく説明があり、普段から使える知識が多かった」「レポートとは何なのか　や どのように書けばよいのか　などの知識がついて、とてもよかったです。今後のレポートが書きやすくなりました」「高校生から一歩ステップアップして、自分の考えや調査の結果をうまくまとめて表現することができるようになった」など、学生の必要感に応じたタイミングと内容による授業を提供できたものと捉えられる。

加えて、情報整理の方法については、学生アンケートに「ノートテイクの方法が変わり、復習のしやすいノートを作ることができるようになった」「大学の授業で使う資料等をまとめるのに役だった」「ノートの取り方に関しては、小学校の時から学んできたものであり、また、最近はパソコンを使うことが多くなっているので学ぶ必要があるのか疑問に感じたが、今まで知らなかったことをたくさん知ることができて、今実践できているため授業を受講して良かったなと思った」などの意見が、また日本語技法については「メールの正しい送り方を学べてよかった」「先生に送るメールの書き方を学べたことで、失礼がないように対応することができるようになった点」などをよかった点として挙げている。

特に今年度受講生からは、プレゼンテーションの方法について肯定意見が多く寄せられている。「スライドの文字の選び方や画像検索での著作権対策などを知ることができたのが良かった」など講義内容に対する意見だけでなく、「今後プレゼンをする機会が増えると思うので今後に活かせることができると考えます。プレゼンは自分が伝えたいことを簡潔にまとめ、みんなが分かりやすい言葉を使って話すことが必要だと理解しました」「プレゼンテーションの方法という講義では、人に伝わるスキルを学ぶことができよかったです。教員という仕事にとって、伝える、プレゼン能力は大切だと思うので学べてよかったです」など、自分の未来像・目指す教員像とつなげて捉える意見が多く挙げられた。これらの成果は、元 Apple 最高経営責任者 スティーブ・ジョブズの製品発表プレゼンテーション動画

を視聴した上で、「スティーブ・ジョブズのプレゼンテーションから技法を学ぶ」という担当教員の授業展開の工夫がもたらしたと推察される。特に、「スティーブ・ジョブズの動画を見て、どこがすごいのか、何を参考にしていけばよいのかということを講義の中で確認できて面白く参考になった」「これまであまりプレゼンをしてきた経験がないので、ジョブズの動画を見るなどして、良いプレゼンのポイントやイメージが掴めたことがよかった」などの意見から、当該授業展開の工夫によって、学生たちの意識を「いかにプレゼンテーション資料を作成するか」よりも、プレゼンを通して「いかに効果的に伝えるか・聞き手に気づかせるか」に向けさせることに繋がったと捉えられる。（これは「これまでの学校の活動で何回かしてきたことはあったが、レイアウトや話し方について詳しく聞いたことがなかった。」という意見からも、高校生までの学びにおいて「効果的に伝える」ことに焦点を当てた指導を経験していないと推察される。）併せて、第９回の授業以降の『学校園を探究しよう』を通して、「実際に学生同士でプレゼンをすることでプレゼンスキルの向上が見込まれた」と、知識・スキルを活用する演習設定が、スキル向上・定着に寄与する可能性について、学生から意見が寄せられている。本事例を参考に、今後とも引き続き、大学生として基礎的な知識・技能の定着に向けた授業実施における工夫改善を重ねたい。

総じて、共通コンテンツを通して「大学生活で必要なノウハウを１から教えてくださり、不安が少しずつ解消されていった」との意見が寄せられている。高校生までとは異なる“大学生としての学び方”のスキルアップの基礎を、４回の共通コンテンツの授業を通して培うことができたとともに、自分でできる達成感を感じながら不安感を解消し、将来に繋がるスキルとしての価値づけを促すことができたと思われる。

（３）改善すべき事項　　～学生の適切な学習環境の確保のために～

教育学部学校教育教員養成課程において実施している「大学入門ゼミ」は、これまで毎年度、４１５講義室において全体指導を行ってきた。全体指導を４１５講義室で行うことによって、１８０名を超える１年次学生にあまねく視線を向けることができることに加え、複数教員が同時に学生指導にあたることによって、受講生一人ひとりの学習状況に目が行き届き、より細やかな個別指導ができるメリットがある。また、４１５講義室で全体授業を実施することによって、学年全体での一斉指導の後、講義室や座席を移動することなく（４１５講義室ではクラス別指定座席制で授業を実施している）、クラス単位で指導を行ったり、グループやペアでの演習を行ったりした上で、改めて学年全体での一斉指導を行うなど、足並みを揃えて授業を進行することができるというように、授業運営上もメリットを多く挙げることができる。併せて、４１５講義室は学生机１席に対し１個の電源が整備されており、入学時に１人１台の購入を求めているパソコン端末を入学直後の「大学入門ゼミ」においても電源の不安なく積極的に活用し、パソコン端末や情報ネットワークの活用による快適な学習環境を学生に提供することができる。

本年度も昨年度までと同様、同じ講義室にて授業実施する旨、昨年度内に担当事務に上申していたものの、初回授業日の授業準備時に４１５講義室が他講義で使用されることになったと伝えられた。8：30（授業開始前２０分）の時点で１８０名を超える学生が収容できる講義室の確保に奔走したが、開いている講義室は無く、８１１・８２２講義室に学生

を誘導し、zoom 接続して全体指導を行うこととなった。しかし、zoom 通信が途中停滞するなど、満足のいく初回授業とはならなかった。

初年次生の学習意欲・学習姿勢を削ぐことに繋がらぬよう、教育学部「大学入門ゼミ」の円滑実施のための適切な学習環境の確保に対し、関係各署の皆様に、令和５年度まで同様のご助力を引き続き賜ることができるよう、この場を借りて強くお願い申し上げたい。

（文責：松下）

2024 年度大学入門ゼミ実施報告書（法学部）

１．実施の概要

本年度の大学入門ゼミは、8 クラス開講し、1 クラス 20 名程度の規模で実施した。担当教員は、岸野薫、金宗郁、鶴園裕基、堤英敬、前原信夫、山本慎一、山本陽一、吉井匡である。

教員は分野の偏りがないよう配慮しながら毎年ランダムに割り当てられ、キャンパスアドバイザー（CA）制度と連動させることで、学生が 3 年次からの専門演習に入るまでの間、入門ゼミ担当者が面談等のケアをすることになる。

入門ゼミの内容は、共通コンテンツとして「情報整理の方法」「日本語技法①・②」「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」を実施する部分と、担当教員が各自の専攻に基づき個別に指導をする部分とに分かれている。共通コンテンツの内容は、各担当教員のシラバスにも明記し、概ね第 1Q 期間の演習でひととおり取り扱っている。

さらに、法学部特有の内容としては、例年、法学部資料室（法学部棟 3 階）と香川大学図書館の利用方法の解説の回を組み入れている。これは、法学・政治学の学習にあたって重要な位置を占める文献資料の検索・収集方法を初年次に身に付けさせる意図がある。もっとも、本年度は、法学部資料室の担当職員の退職に伴い、法外部資料室の説明は、当該職員が事前に作成したスライド資料に基づき、担当教員が実施した。

また、大学入門ゼミの全受講生を対象に、犯罪被害者が抱える問題をテーマにした心理カウンセラーによる講演会（本年は 5 月に実施）を開催し、規範意識と倫理観の涵養を促すとともに、レポート提出を義務づけて添削指導の機会を設けている。さらに、本年度は、香川県消費生活センター担当者による消費生活相談に関する講演会（６月に実施）も開催し、成人年齢の引下げにともなう消費者トラブルの危険とその対処法について理解を促し、レポート提出を通じて理解度の確認を図っている。

２．学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

共通コンテンツに対する学生からの評価は、概ね好意的といってよい。とりわけ、レポート作成のルールや具体的な方法について、好意的に評価している回答が多い。一年生という大学生活の中でも特にレポート課題を多くこなす必要がある年次において、共通コンテンツが学生にとって非常に有意義な役割を果たしていることが窺われる。また、プレゼンテーションの方法についても有益であったとする回答が多い。プレゼンテーション能力は大学生にとって必須のスキルであり、一年生のうちから確実に修得できる意義は大きい。他方で、これらに関しては、教授方法や比重の置き方が担当教員の判断に委ねられていることもあり、クラスによっては、教授の方法や時間配分を改善してほしいという意見もいくつか見られる。

総評として、アンケートの結果は概ね高評価であったが、学生ごとのレベルや共通コンテンツに対するニーズが違うこと、また、担当教員の教育に対する考え方も多様であることから、アンケート評価にもばらつきが見られる。担当教員の考え方は尊重されるべきであり、画一的な教育法を押し付けることは好ましくない。その一方で、教育内容の質的保障は担保されるべきともいえる。この点、共通コンテンツを

通じて、香川大学生としての基礎的なアカデミックスキルを習得させる機会を確保し、共通の枠組みを維持して初年次学生に対して提供することの意義は大きいといえる。

また、このアンケート結果を担当教員および次年度に担当予定の教員の間で共有し、画一的な教授方法ではなく、少人数教育の特長を活かしてきめ細かな指導のあり方を検討し、実施していくことが必要と思われる。

３．教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

学部において大学入門ゼミの導入当初は、一部で、共通コンテンツを実施せず、共通コンテンツの内容を反映させた教員独自のコンテンツによって少人数教育を実施したクラスがあったものの、それから一定期間が経過し、全クラスで共通コンテンツの内容をシラバスに明記し、演習の中で実践することが定着した。これは共通コンテンツの意義や有用性が、教員間にも一定程度理解されるようになった証左であるといえよう。

他方で、教員アンケート結果からは、多くの教員が、共通コンテンツを通じて教授したことを学生に実践させることの難しさを感じていることが窺われる。実際、レポート作成やプレゼンテーションについては、教授後の授業内で実践できている学生と、そうでない学生の差があるという意見がみられる。また、大学入門ゼミでこれらのスキルを学修したにもかかわらず、上級生になった際に実践できている学生が少ないという評価もある。そのような中で、担当教員は、共通コンテンツの内容を一通り教授した後も、各ゼミのテーマに合わせて担当教員が工夫を凝らしながら指導している。

学生アンケートと同様に教員アンケートについても、各担当教員にアンケート結果のフィードバックを行うとともに、次年度に担当予定となる教員に対しても、共通コンテンツの教授方法・内容についての心構えとして、アンケート結果の内容を共有することは有益であるため、担当者が決定次第、実施する予定である。

４．改善すべき点等

法学部の特徴として、日本語技法を教えることの重要性を指摘する担当教員が多い。実際、法学部では昨年度に学生の文章力向上に関する FD を実施している。また、近年はスマートフォンの普及によって、相対的に PC の利用が減っていることもあり、学生の文章力が総じて低下しているようにも思われる。このことは、レポートの質や期末試験の回答状況に対して大きな影響を及ぼす。かような現状を踏まえて、PC 必携化、DRI 教育、生成系 AI（ChatGPT 等）との付き合い方といった要素も採り入れた、新たな『大学入門ゼミハンドブック』の制作を検討していただきたい。

2024 年度大学入門ゼミ実施報告書（経済学部）

１．　実施の概要

令和 6 年度の経済学部の開講数は昼間 14 クラス・夜間 0 クラスで、担当教員数は各クラス 1 名の 14 名で実施した。学生のクラス分けに際しては、今年度も同じ名前の学生が重ならないよう配慮した。また、今年度からの特徴として、クラス分けの際、2 年次後期からの学生の所属希望コースを基にした、グループごとの編成とした。そのため、クラスごとに人数のばらつきが多少生じることになった。その際、主担当コースではなく、副担当コースの学生を担当する教員も一定数発生した。

経済学部では例年 1 月に大学入門ゼミ担当者全員で打ち合わせを行い、共通シラバスの確認、共通コンテンツの内容や、15 回のスケジュールのすり合わせなどについて話し合いの場を設けている。その打ち合わせで共有された主な内容として、共通コンテンツの教え方は各クラスの担当教員に任されているが、「レポートの提出（1 回以上)」「PPT を使ったプレゼンテーション（1 回以上)」「教員へのメール送信」を最低限行い、それにより成績評価に反映させること、成績がクラスによって偏らないように配慮することなどがあげられる。（おおむね、優評価を基本とする。）また、今年度より授業のうちの 1 回をグループ活動として、栗林公園や日本銀行高松支店などの学外研修に行くことなど、各グループの特色に応じた活動をすることを可能とした。

２．　学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

学生アンケートでは、「レポートやメールの書き方、特に日本語の正しい用法、参考文献の書き方を学べることができ、社会人に向けての初歩的なステップアップをすることが出来た」といった意見や、「プレゼンテーションの方法を色々教えて頂いてとてもためになった。」などといった意見があった。これらのように、レポートの書き方、メールの書き方、プレゼンテーションの方法について言及する学生が多く、それらの事柄を共通コンテンツとしている成果と思われる。それ以外には、グループワークなどを通して、友人をつくることができたなどといった意見もあった。また、グループごとの特色を踏まえた講義内容が良かったなどの意見もあった。

３．　教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

各教員が共通コンテンツの教育方法について工夫していることがアンケート回答からわかる。「全学共通コンテンツは薄めにして、オリジナルの部分を増やした。」「学生が楽しめるようにアイスブレイクやグループワークを多めに取り入れた」「今年度より希望コースごとに学生を割り振ったのでプレゼンのテーマを当該コースに沿ったものにした」とあるように、各教員が工夫をこらし、授業を行った。

「大学入門ゼミ」の教育効果として、「正直、あまり効果を感じない。２年次以降の講義では、レポートの形式を守らない学生が多い。レポートや卒論の執筆にあたって、引用のしかたや参考文献の示し方などを改めて説明する必要がある。」といった意見もみられた。また一方で、「受講する学生の基礎学力に差があるため，全員が関心をもつことは難しいでしょう。できていない学生もいるので，スライドの内容を一通り教える意義はあると考えます。」との意見もあった。加えて、「大学生活の基本を教えることも重要ですが、何より友人を作る場として重要な授業かと思います。孤立している学生ほど、その後ど

んどん出席率・成績が低下していく傾向にあるように感じます。学生の学習意欲を低下させないためにも、この授業では、学生を孤立させない工夫が重要かと思います。」との意見もあった。

４．　改善すべき点等

学生からは「グループ活動をもっと増やしてほしかった。」「もっと生徒間の交流を増やしてほしい。」などの意見があった。また、これとも関連して、「他のクラスと内容を似せて欲しい」「教員によって課題や実施する事柄が大きく異なる」などの意見があり、学生間で他のクラスの授業内容を情報共有している場合があり、クラスのあいだでの内容の差、グループワークやフィールドワークの差について言及する学生が散見された。共通コンテンツ以外の授業内容を各教員に任せている利点でありつつ、その代償と思われる。また、「大学では質の良い友達を」といった教員の配慮のない言葉遣いに対する苦情もみられた。

一方で、教員からは「情報整理の方法やプレゼンのジェスチャーなど、いくつかのコンテンツを不要だと感じた」「自宅学習用の課題を増やしていただけると助かる。」などといった意見もみられた。また、筆者の担当した大学入門ゼミでは、レポート課題で生成 AI を利用した文章を提出した学生が数多く見られた。そのため、学生に向けて、生成 AI との向き合い方（利点・欠点、生成 AI の特徴など）についての香川大学の方針を説明する内容も必要であると感じた。

（文責：福村）

2024 年度大学入門ゼミ実施報告書（創造工学部）

１．　実施の概要

創造工学部は 7 コースに分かれており、そこでの開講数は T1～T16 の 16 クラスである。授業担当者は 1 年生 CA の 16 名であり、クラスの規模は 20 名前後となっている。創造工学部で大学入門ゼミを開講するにあたっては、本年度の大学入門ゼミを担当する全教員と日程や実施方法について 3 月 28 日にメールで相談し、全体の合意を取りつつ実施している。その中でも可能な部分は合同開催とし、コース間、クラス間で相互に協力しながら実施している。第 1～5 回は創造工学部全体で同様の内容を行うこととし、以下のようにコース間またはクラス間での合同開催とした。

第１回 4/10 大学入門ゼミ授業ガイダンス（各コースで実施）
第２回 4/17 図書館利用講習（林町の図書分館で実施，造形のみ幸町の図書館で実施）
第３回 4/24 保健管理センターからの講義： 2 限（4 コース合同）と 3 限（3 コース合同）で対面実施（幸町は遠隔配信）
第 4 回 5/8 高松南署からの講義： ２限と３限で対面（幸町は遠隔配信）
第 5 回 5/15 令和 4 年度基盤力テスト（各コースの部屋で同時に実施）

第 5 回までは外部講師を招き、大学生活を送るうえで重要な知識やスキルを得られる機会を設けるようにした。具体的には，第 3 回 保健管理センター講師による講習、ならびに第４回 香川県警の現職警察官による「生活安全・交通安全・防犯」の講習を順次おこなった。その後，各コースでの共通コンテンツ教育ならびにコース毎の独自カリキュラムを実施した。また、第５回の基盤力テスト（全学共通学力テスト：大学に入学したばかりの新入生が、理系の基礎知識をどの程度身につけているのかを客観的な指標をもとに測ることができるテスト）に関しては、本学部では例年大学入門ゼミの 4 月末から 5 月始めを利用して実施しているものである。

第 6～15 回に含まれる全学での共通コンテンツ（講義 5 回分）の教え方は各コースに一任されているため、「情報整理の方法」（1 回）、「レポートの書き方」（1 回）、「日本語技法」（2 回）、「プレゼンテーションの方法」（1 回）についての講義は、コースごと、授業担当者ごとに教育上で様々な工夫がなされている。例えば、日本語技法において、チャット GTP を使って作成したメール文をそのまま教員宛に送信する事例を紹介し、使い方とマナーについて解説しているクラスもあった。これは近年身近になった AI 技術などの情報化社会に対して大学生らしい素養を身につけるための時代に合った試みである。

２．　学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

先年度のアンケート結果と同様に、レポートの書き方についての学べてよかったとの回答が多く見られた。高校時代まで専門的にレポートの書き方やプレゼンテーションの方法について習った経験がなかったが、大学に入学してからレポートの提出やプレゼンテーションをする機会が増えたため、「レポートの書き方」や「プレゼン―ションの方法」といった共通コンテンツが役に立ったという意見が多かった。また、大学生活についても知ることができたという意見も少なからずあり、第３回の保健管理センターからの講義と第 4 回の高松南署からの講義の効果が高かったといえる。なお、創造工学部では第 6 回以

降は各コースで独自の授業を実施しており、その中で工場見学を実施したコースや、コースの全教員が大学時代に学んできたこと・何を学んでよかったと・いま何を学べばよいと感じているのかなどをオムニバス形式で講義するコースがあり、それぞれについて好評であったことがうかがいしれた。

３．　教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

今回、創造工学部の大学入門ゼミの成績評価で不可判定が 11 名であり、例年に比較して多い結果となった。このことを中心に担当教員へのアンケート調査を実施した結果、単位取得要件のための出席率やレポート提出率が低下した学生に対して CA が積極的に働きかけていたコースでは不可判定数を最低限にとどめてい。その一方で、休みがちではあるが、連続して休むわけではない学生へのアプローチに迷い、結果的に声をかけられなかったケースや、本人の精神的な負担となるために呼びかけを控えた結果不可判定となったケースがあった。

４．　改善すべき点等

学生によっては保護者との関係が悪い場合やクラスにうまくなじめていない場合、さらに心の病が発生している場合など、さまざまなケースがあり、慎重を要する。そのため、各担当教員がどのタイミングで学生に連絡をとり、その連絡でもうまくいかなければ、どのタイミングで保護者に連絡をとるべきかの参考となるフローチャートがあればよいのではないかと考えられる。

2024 年度大学入門ゼミ実施報告書(医学部・髙橋弘雄)

１．　実施の概要

学生に対する希望調査により医学科学生（110 名）を 4 ゼミ教員計 5 名で担当、看護学科と臨床心理学科の合同で両学科学生（85 名）を３ゼミ教員計 8 名で担当した（医学部受講全学生数 195 名、前期全 15 コマ）。

		担当者	クラス規模
M（1）	医療材料としての核酸	栗原亮介	28 人
M（2）	生体における塩と水の機能	北田研人・RAHMAN MD ASADUR	28 人
M（3）	医学研究における動物実験と動物倫理	伊藤日加瑠	27 人
M（4）	生物学におけるアカデミックリテラシー	髙橋弘雄	27 人
M（5）	日本語の技法と情報倫理	藤井豊・原田さゆり・石井有美子	26 人
M（6）	双方向学習のスキルアップ	市原多香子・渡邉久美・谷本公重	30 人
M（7）	医療における心理学	川人潤子・野口修司	29 人

２．　学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

学生アンケートでは、レポートの書き方のパートが有益であった、という意見が多く見られた。大学に入り初めてレポートを書く時期となることから、学生のニーズにマッチしていると感じた。レポートの書き方の講義を最初に行っている教員もおり、そのような対応も有用であると感じる。日本語技法の中では、特にメールの書き方に関して、目上の人へのメールの書き方が分かってよかった、というポジティブな反応が多く見られた。一方、日本語技法の実践や、敬語の使い方など、細かい内容にも触れて欲しいという意見も散見された。またプレゼンテーションの方法に関しても、特に有用であったという意見が多く寄せられていた。パワーポイントを使ったプレゼン資料の作成や、実際にプレゼンテーションを行う機会を持てたことなどが、今後の大学生活に活きるという評価が多かった。全体的に、大学生活の最初の段階でアカデミックリテラシーに関わる共通コンテンツを学ぶ機会を持てたことは有益であった、というコメントが多く、講義の目的が達成されていると思う。

３．　教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

教員アンケートでは、共通コンテンツを教える意義や教育効果を感じたという意見が多く見られた。一方、単位を落とさないことが前提となる科目であるため、教育効果が下がっているという意見もあった。講義で工夫している点としては、専門の内容を盛り込むことや、プレゼンテーションを個人で行う、プレゼンの振り返り・改善の時間を取る、ディベートを取り入れる、などそれぞれの教員の工夫が見られた。

４．　改善すべき点等（もしくは『大学入門ゼミハンドブック』についての意見）

『大学入門ゼミハンドブック』に関して、とても有用であるという意見があった。

2024 年度大学入門ゼミ実施報告書（創造工学部）

１．　実施の概要

創造工学部は 7 コースに分かれており、そこでの開講数は T1～T16 の 16 クラスである。授業担当者は 1 年生 CA の 16 名であり、クラスの規模は 20 名前後となっている。創造工学部で大学入門ゼミを開講するにあたっては、本年度の大学入門ゼミを担当する全教員と日程や実施方法について 3 月 28 日にメールで相談し、全体の合意を取りつつ実施している。その中でも可能な部分は合同開催とし、コース間、クラス間で相互に協力しながら実施している。第 1～5 回は創造工学部全体で同様の内容を行うこととし、以下のようにコース間またはクラス間での合同開催とした。

第１回 4/10 大学入門ゼミ授業ガイダンス（各コースで実施）
第２回 4/17 図書館利用講習（林町の図書分館で実施，造形のみ幸町の図書館で実施）
第３回 4/24 保健管理センターからの講義： 2 限（4 コース合同）と 3 限（3 コース合同）で対面実施（幸町は遠隔配信）
第 4 回 5/8 高松南署からの講義： ２限と３限で対面（幸町は遠隔配信）
第 5 回 5/15 令和 4 年度基盤力テスト（各コースの部屋で同時に実施）

第 5 回までは外部講師を招き、大学生活を送るうえで重要な知識やスキルを得られる機会を設けるようにした。具体的には，第 3 回 保健管理センター講師による講習、ならびに第４回 香川県警の現職警察官による「生活安全・交通安全・防犯」の講習を順次おこなった。その後，各コースでの共通コンテンツ教育ならびにコース毎の独自カリキュラムを実施した。また、第５回の基盤力テスト（全学共通学力テスト：大学に入学したばかりの新入生が、理系の基礎知識をどの程度身につけているのかを客観的な指標をもとに測ることができるテスト）に関しては、本学部では例年大学入門ゼミの 4 月末から 5 月始めを利用して実施しているものである。

第 6～15 回に含まれる全学での共通コンテンツ（講義 5 回分）の教え方は各コースに一任されているため、「情報整理の方法」（1 回）、「レポートの書き方」（1 回）、「日本語技法」（2 回）、「プレゼンテーションの方法」（1 回）についての講義は、コースごと、授業担当者ごとに教育上で様々な工夫がなされている。例えば、日本語技法において、チャット GTP を使って作成したメール文をそのまま教員宛に送信する事例を紹介し、使い方とマナーについて解説しているクラスもあった。これは近年身近になった AI 技術などの情報化社会に対して大学生らしい素養を身につけるための時代に合った試みである。

２．　学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

先年度のアンケート結果と同様に、レポートの書き方についての学べてよかったとの回答が多く見られた。高校時代まで専門的にレポートの書き方やプレゼンテーションの方法について習った経験がなかったが、大学に入学してからレポートの提出やプレゼンテーションをする機会が増えたため、「レポートの書き方」や「プレゼン―ションの方法」といった共通コンテンツが役に立ったという意見が多かった。また、大学生活についても知ることができたという意見も少なからずあり、第３回の保健管理センターからの講義と第 4 回の高松南署からの講義の効果が高かったといえる。なお、創造工学部では第 6 回以

降は各コースで独自の授業を実施しており、その中で工場見学を実施したコースや、コースの全教員が大学時代に学んできたこと・何を学んでよかったと・いま何を学べばよいと感じているのかなどをオムニバス形式で講義するコースがあり、それぞれについて好評であったことがうかがいしれた。

３．　教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

今回、創造工学部の大学入門ゼミの成績評価で不可判定が 11 名であり、例年に比較して多い結果となった。このことを中心に担当教員へのアンケート調査を実施した結果、単位取得要件のための出席率やレポート提出率が低下した学生に対して CA が積極的に働きかけていたコースでは不可判定数を最低限にとどめてい。その一方で、休みがちではあるが、連続して休むわけではない学生へのアプローチに迷い、結果的に声をかけられなかったケースや、本人の精神的な負担となるために呼びかけを控えた結果不可判定となったケースがあった。

４．　改善すべき点等

学生によっては保護者との関係が悪い場合やクラスにうまくなじめていない場合、さらに心の病が発生している場合など、さまざまなケースがあり、慎重を要する。そのため、各担当教員がどのタイミングで学生に連絡をとり、その連絡でもうまくいかなければ、どのタイミングで保護者に連絡をとるべきかの参考となるフローチャートがあればよいのではないかと考えられる。

2024 年度大学入門ゼミ実施報告書（農学部）

１．実施の概要

令和 6 年度、農学部における大学入門ゼミは、担当教員 10 名で、下記の表 1 に記載の 10 クラス（A1〜A10）体制で実施した。また、A1 と A2、A3 と A4、A5 と A6、A7 と A8、A9 と A10 は、それぞれグループを構成し、実施内容に応じて、クラス単位またはグループ単位で適宜開講し、教育効果の向上に努めた。なお、担当教員は全員新入生のアドバイザー教員（クラス担任）である（※農学部では、2021 年度から、学生支援の観点から新入生と身近なアドバイザー教員の置くことが効果的だと考えられ、新入生のアドバイザー教員が大学入門ゼミを担当している）。

表1：令和6年度の農学部における大学入門ゼミ実施体制

	クラス	受講人数	講義題目
第1グループ	A1	16	応用生物科学の展開
	A2	16	応用生物科学の展開
第2グループ	A3	15	応用生物科学の展開
	A4	16	応用生物科学の展開
第3グループ	A5	16	応用生物科学の展開
	A6	15	応用生物科学の展開
第4グループ	A7	16	応用生物科学の展開
	A8	15	応用生物科学の展開
第5グループ	A9	16	応用生物科学の展開
	A10	14	応用生物科学の展開

複数の教員が担当することから、また、はじめて担当する教員もいることから、実施に際しては、事前に会合をする場を設け、担当者間でのシラバスの作成、実施方法、評価の方法などについて情報共有を行った。さらに、今年度実施分から、全 10 クラスのシラバス記載内容の統一化を行った。

授業内容については、全学共通コンテンツ「日本語技法」、「情報整理の方法」、「レポートの書き方」、「プレゼンテーションの方法」の後、各クラスの担当教員が提示するテーマに基づいて、「課題プレゼンテーションおよび討論」が実施された。また、その間、DRI 教育コンテンツのデザイン思考コンテンツの視聴も行った。さらに、情報収集の一環として、図書館（農学部分館）訪問も実施した。今年度は、図書館のご協力を得て、農学部分館のクイズラリー企画と共同した。

２．学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

Q1）上記のスキル教育を受けて良かった点は何ですか？について：特に、「レポートの書き方」や「プレゼンテーションの仕方」について、今後の大学生活において参考になったとの意見が多く見られた。これらのコンテンツは高校まででは行って来なかったスキル教育ということもあり、他のコンテンツとの調整もあるが、修得促進のためさらに時間を掛ける必要性があると考えられた。

Q2）上記のスキル教育で授業に対して改善を望む点は何ですか？について：数多くの要望やコメントの中でも、やはり上述のプレゼンテーションに関するコメントが多く、受講生のプレゼンテーション学修に向けた取り組みにおいて、実施方法の改善が考えられた。

Q3）その他としては：スライドの作り方に関してのコメントがあった。

３．教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

Q1)「全学共通コンテンツ」を教えてみて、考えたこと・感じたことについて：レポートの作成やプレゼンテーションの仕方などコンテンツとしてはよく考えられた内容であり有効であるとの意見があった。一方で、全体的に特定の分野にバイアスした感があるとの意見もあった。

Q2)「全学共通コンテンツ」を教える際の工夫について：農学部の教育・実習にあうようにカスタマイズ

するなどの工夫が見られた。具体的には、当該分野で必要となってくる実験関係のレポートの書き方(客観的に考察するために根拠となるデータを具体的に記述するまたは図表等で示す等)、研究成果のプレゼンテーション（卒業研究発表・学会発表等)での注意点、理系の論文での表記等の説明、さらに、例を示しながらの研究倫理の説明などの取り組みが見られた。

Q3)「大学入門ゼミハンドブック」について：授業のベースとして使用できるので、学習効果の向上に貢献できる。しかしながら、内容が当該学部の分野にあったものでないため、一般講義でのレポートやプレゼンテーションには有益であるが、理系分野に特徴的な実験や研究成果のレポートやプレゼンテーションのためには補足説明を行う必要があるとの意見があった。また、パワーポイントのコンテンツやハンドブック等について、授業開始前の早めの時期に利用できるようにしてほしいとの要望があった。

Q4)「大学入門ゼミ」の教育効果について：「農学部ではアドバイザーと直結しているため、概ね仕組みも含めて教育効果は高いと感じる」、「近年は、講義の際のレポートの書き方等が整った学生や研究室でのプレゼンにすんなり取り組める学生が増えてきたように感じており、その点では教育効果が出ているのではないかと感じている」 の意見があり、大学入門ゼミによる一定の教育効果は出ていると考えられた。

４．改善すべき点等

改善すべき点等としては、全学共通コンテンツ資料（大学入門ゼミハンドブック）におけるコンプライアンスや倫理（情報、研究等)に関する項目の一層の充実化が考えられた。